
タマネギ

谷下功兵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

タマネギ

【コード】

N0884I

【作者名】

谷下功兵

【あらすじ】

その後、その場所に高層ビルが二本作られた。

今日は地球が生まれた日らしい。

「あなたは私たちの子どもではないの」

そう告げられたのは、見るからに怪しい格好をしていたからだろう。

僕は家を飛び出した。

あっけなかった。

公園で鬼ごっこをしていたら、急に女が現れた。

「一緒に鬼ごっこするかい？」

女は震え出した。

「先生大変です！ 女が……………」

女が言う。

「どうした！ 大変だ！ 救急車を呼ぼう」

「はい！ でも無理です先生！ 僕は……………」

女が言う。

「それ以上言うな！ 私だってわかってる！」

その時、僕はなぜそうなったのか分からなかった。

見る度にでかくなる塊から離れられない女を、僕はデートに誘った。

全てが計画通りだった。

お陰で僕は聴力を失った。

これも計画の内だ。

黒い服の男は嘲笑った。

「お前はそういう運命なんだよ」

「でも先生はタバコを吸わない！」

黒い服の男が言う。

「何を言っている。俺はずっと吸っているじゃないか」

今思えば俺が幼かったのだろう。

ロウソクを一つ消すごとに、その姿がはっきりしてきた。

「私は八時の飛行機でそつちに行くよ」

と言ったものの、未だに脱出出来ずにいた。

ふと、窓の外に顔を出した。

そう、それが答えだった。

「先生、俺やりました！ 謎が解けそうです」

僧侶が言う。

「そうか、それはよかった」

「はい！ ところで今日は暇ですか？」

女が言う。

「今日はこのあと会議があるんだ」

俺は息が上がっていたが、それを言うと殺されると知っていたので我慢した。

女が言う。

「もうすぐ日付が変わる。そしたら好きにしていいわ」

「俺そんなの聞いてないですよ」

女が言う。

「それはあなた．．．．聴力がないからよ」

俺は何も言えなかった。

先生はまた一口、生のタマネギをかじっていた。

「先生知ってますか、タマネギって野菜の中で最も糖分が多いんですよ」

その夜、先生が占い師の免許を所得したのは言うまでもない。

別に記憶を消したいわけではないのだが、無意識に言ってしまったのだから仕方がないのだーそう思う事で今日も終えることができる。

『文句のある奴は事務所まで』という看板を見つけたのは、三年間片想いだった女にフラれた帰り道の出来事。

勿論、両想いだと信じていたから告白したわけで、つい二十分前に

片想いだと知った時は驚愕した。

僕は事務所のベルを鳴らした。

それが合図だったらしい、世界中のミサイルが一人の少女に向けられた。

この渋さなら東京都が読書の秋に入ったのも納得がいく。

今日も死者はいない。

キリンの首ほど長く、象の鼻ほど長い腕を組み、考える。

「はっぴばあすでえとうゆう……はっぴばあすでえとうゆうー」

少女は、灰になった町を見下ろして歌い出した。

「はっぴばあすでえであー」

ミサイルはまるでロウソクのように空に刺さり、やがて少女に降り注いだ。

今日は少女が殺された日らしい。

ロウソクの火は、消されることはない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0884i/>

タマネギ

2010年10月22日00時58分発行